園長通信～こころ～ №１２

日本通り

2024.4.19

この前の週末は、天気がよかった。暑くもなく寒くもなかった。加えて、風もなかった。絶好のお花見日和だった。家人が、お父さんとお母さんをお花見に連れていきたいという。私にとっては義父と義母である。願ってもないお天気である。これは、行くしかない。

郡山のお花見といえば、開成山公園である。今まで、公園内の一部しか見たことがなかった。お花見の時期に来たこともなかった。したがって、開成山の桜を見るのは初めてだった。公園自体が広く、綺麗で、桜もたくさんあった。お花見の条件がそろっていた。近くには、昔から有名なお団子屋さんもある。

これが、福島ならば、信夫山になるのだろうか。あるいは、大森城山あたりだろうか。花見山はちょっと違う。シートを敷いて、みんなでワイワイという感じではない。お花見に限らず、市民にとっての憩いの場というのは大切な存在である。

イタリアに３年間いた。ローマに住んでいた。向こうでは、通りに必ず名前がついている。それがそのまま住所になる。私が住んでいたマンションの通りの名は、モンテビアンコだった。イタリア語で白い山、イタリアとフランスの国境にあるヨーロッパ最高峰のモンブランのことである。住所は、モンテビアンコ通り７１番地といったぐあいになる。

ローマに、日本通りというところがあった。日本から贈られた桜が並び、散歩道という風情だった。ローマに来て２年目の春だったか、この情報を教えていただき、実際に行ってみた。桜が綺麗に咲いていた。そこだけは、まるで日本のようだった。ローマでは、なかなか日本を味わうことはできない。自分が日本人であることを実感できる貴重な場となった。

ここ数年だろうか。コロナがきっかけになったように思うが、福島の桜を味わうようになってきた。今までは、知らずにいた桜の名所を訪れるようになった。桜は、ソメイヨシノに限らない。しだれ桜も見事である。喜多方の日中線しだれ桜並木などは、それはそれは見事である。

桜の木の下では、みんな幸せそうである。桜には、人を笑顔にする、人を幸せにする力がある。開成山公園では、義父も義母も笑顔だった。何枚も写真を撮った。老人ホームのパンフレットにしたいような写真もあった。

桜は、日本の象徴でもある。ようやく咲いたかと思ったら、わずか数日で見頃は終わってしまう。あの儚さがいいのだろう。日本人の季節感や感性に合致する花の一つである。他にも梅や桃もある。いずれにも味わいがある。だが、桜の位置づけは特別なもののように思う。来年もまた、開成山公園の桜をみんなで楽しみたい。そして、義父と義母の笑顔を写真に収めたい。